

持続可能で効果的な放課後学習「とみこや」の実践と考察

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻

山崎 翔

1. はじめに

教育基本法第1条では「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」とあるように、教育の目標は「人格の形成」と「心の育成」にある。ここには産まれながらに同様のポテンシャルを持つという信念があり、誰にでも同様の成果を与えるという「結果の平等」という概念形成につながる。しかし、知識や技能には個人差があることは明確であり、集団の中で同様の成果を求めていく学校のスタイルの中では、授業についていけない生徒が生まれていくという問題がある。

また、昨今、生徒の多様化や地域社会の教育力の低下などの問題も重なり、その問題はより深刻になってきており、学業の不振は不登校生徒の増加の要因にもなっている。

新学習指導要領総則の中には「基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視すること。」とあるが、それを多様な生徒が存在する授業の中で達成させることは容易ではなく、真の意味での教育の機会均等を考えた時に、放課後の学習支援の場は必要であると考えられる。

だが一方、TALIS2018の教員の労働時間の調査によると、中学校の週の平均労働時間は56.0時間に及んでおり、これ以上、教員に仕事を増やすことは持続可能な取り組みとは言い難い現状が存在している。

2. 研究の目的

A中学校では、昨年度より放課後の学習支援は行われているが、その取り組みはまだまだ学校全体の取り組みとは言い難く、さらに大学生ボランティアの生かし方にも課題が見られた。そこで今年度A中学校では、生徒だけでなく職員にとっても魅力的であり、さらにどの学校でも持続可能な取り組みにできるような放課後学習支援の在り方を検証することを目的としている。

3. 研究の方法

持続可能な取り組みにするためには、生徒だけでなく職員にとっても魅力的な学習支援でなければならないと考えた為、ケラー(1987,1999)の開発した、魅力を引き出すためのARCSモデルと名づけた動機付け設計モデルに合わせて、放課後の学習支援を設計した。

具体的な設計として、注意を惹かせるために「とみこや」という親しみが持てる名前にし、事前アンケートやポスターや広告を通してコンセプトや内容の伝達を行った。運営面でも、誰でもできるようにという視点から、学校に支給されているタブレットや2in1PCを用いて、「Qubena」や「デキタス」というデジタル教材を活用した。また、大学生ボランティアの活用では、大学生自身が自ら講座を考えてもらい実施するという形式を取ること、責任感を強め、さらに教職を目指している学生にとっての経験を積める場になるようにした。

4. 検証結果と考察

12月に、A中学校に在籍する1、2年生437名と全職員(回答は25名)にアンケート調査を実施した。

生徒のアンケートでは、すべての項目で約7割が肯定的な意見であり、概ね魅力的な学習会を実施できていることが考えられる。また、「とみこや」に参加したことがある生徒とそうでない生徒を比較したのだが、参加生徒の方が、「勉強が好き」「学校の授業はわかりやすい」という値が高かったのだが、一方では、割り算が初めて理解できたという生徒も参加していた。「授業では自分の考えを発表している」「自分には良いところがある」という値は参加生徒の方が低いという結果が得られた。このことから、多様な生徒へのニーズを答える場としての機能は果たしているながらも、授業の中で自らを表現できる場が少ないことが推察される。

職員のアンケート結果からは、「とみこや」の持続可能性と職員が参加してほしいと感じる生徒を「とみこや」に繋ぐシステムの構築が課題となった。地域コーディネーターを立ち上げ安定した取り組みにすることと、職員と「とみこや」を繋ぐシステムの構築が求められている。